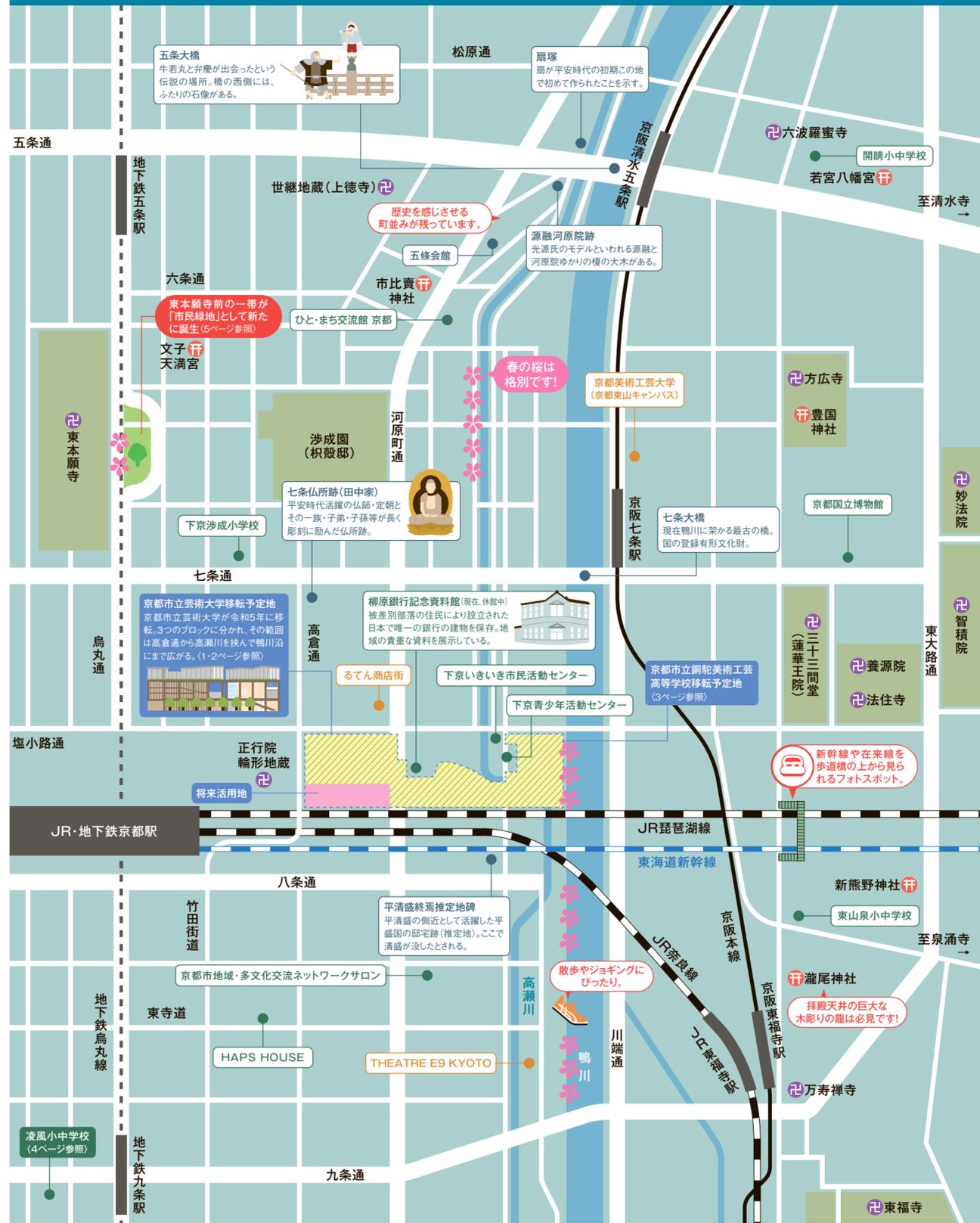


／お散歩しながら、このまちの文化と出会う。／

5 TO 9 Walking MAP



御意見・御感想大募集!

5TO9(ゴートゥ・ナイン)への御意見・御感想の他、「こんな素敵な人がいる! あんな素敵な場所がある!」という情報をぜひお寄せください! ※いただいた内容は、誌面上で紹介する場合がございます。

【お送り先】▶京都市総合企画局プロジェクト推進室 TEL.075-222-3176(土、日、祝を除く 午前8:45~午後5:30) FAX.075-213-0443 〒604-8571 京都市中京区寺町通御池上る上本能寺前町488番地 ☒project@city.kyoto.lg.jp



京都駅東部・東南部エリアのカルチャーを発信。

5 TO 9

East and South-east Parts of the Kyoto Station Area CULTURE JOURNAL





Profile | あかまつ たまめ | 赤松玉女さん

画家。公立大学法人京都市立芸術大学理事長兼学長。1959年兵庫県尼崎市生まれ。1984年に京都市立芸術大学大学院美術研究科修士課程絵画専攻(油画)修了後、国内外の美術館やギャラリーでの展覧会を中心に活動。油彩、水彩、プレスコ技法等、画材や技法を組み合わせた絵画表現を研究。イタリアでの創作活動等を経て1993年に京都市立芸術大学美術学部美術科油画専攻教員に着任。2018年度から同美術学部長。2019年4月から現職。2020年度尼崎市民芸術賞、2021年度亀高文子記念一赤州社賞。

京都市立芸術大学学長

あかまつ たまめ

赤松玉女さんが芸術の力で 目指す、地域との共生。

創造の現場であり続けた 140余年の歩み。

令和5年10月、京都市立芸術大学が京都駅東部エリアに全面移転する。明治13年(1880)に開学した京都府画学校を起源とし、文化芸術都市・京都と共に発展してきた京都芸大。140年を超える歩みの中で大学が大切にしてきたことは、次の3つに集約されると学長の赤松玉女さんは語る。
「1つ目は創造の現場であること。創造とは想像したことを「技(わざ)」によって個々の表現に置き換えることですが、思考や感情を形や音にするために必要な技と知を習得すると同時に、自らが表現すべきはなんであるのかを探り続けます。0から1を生み出す創造とは?表現とは?に、学生と教員が一緒になって問い続ける現場が京都芸大です」。
2つ目は創造の過程や成果の共有と公開。「少人数の本学(学生1,073人:令和4年5月1日時点)には、学科や専攻の壁を越えて学生同士や教員とのつながりが密という強みがあります。

このネットワークを生かし、学生たちは自分にはない視点、専門外の発想を分かち合いながら自らの可能性を高めることができるのです。こうして生み出された成果は学内だけでなく、展覧会や演奏会をとおして広く一般に公開しています」。
そして3つ目に、赤松さんはオルタナティブな視点(もう一つの視点)の提供を挙げる。「芸術は今ある物事を知り、疑うことから始まります。これまであたり前と思っていたことも、違う視点から眺め、違う方法を試し、失敗を繰り返す。独自の表現はそういった自由な試みから生まれるものであり、本学では常識にとらわれない視点を持つ人材の育成に力を注いでいます」。

地域に開かれ、ゆるやかにつながる 「テラス」のような大学へ。

これまで大切にしてきたことを新キャンパスでさらに強力に推し進めるため、京都芸大では新たな大学像を定めた。「それはテラスのような大学にな

ることです。テラスってオープンな空間ですよ。せっかく京都の真ん中に移るのだから外に向かって開かれ、地域の人たちからも「顔」が見えるような京都芸大であるべきだと考えました。学生と教員が今以上にさまざまな人とつながり、そこから得た経験が創造に生かされることで国際的な文化芸術の交流拠点になるのが京都芸大の新たな理想だ。実際に新キャンパス内にテラスのような場が生まれる。「学園祭や地域を巻き込む催しの場となる交流広場、各種演奏会の舞台となる音楽ホール、学外にも開かれた図書館、最先端の芸術や本学の歴史をご覧いただけるギャラリーや資料館などオープンな空間がいくつもできる予定です」。



キャンパス内には高瀬川が流れ開放的な空間となる。

5 TO 9 Tamame Akamatsu, President of Kyoto City University of Arts, aims to encourage interaction between the university and local community through the power of art.

Special Interview

「地域にひとり、芸大生」 溶け込んでいく芸術の力。

キャンパスの移転により、京都駅東部エリアに多くの芸大生がやってくる。赤松さんから見た、彼ら彼女らについて聞いてみた。「例えば何かを伝えるとき、言葉や文字だけでなく、パパッと絵を描いてみる、つくってみる学生が多いかも。その方がイメージを共有しやすいし、話も早い。実は私もそうですね(笑)」。

絵だけでなく、音や形など芸大生の表現方法はさまざま、それは新たなアイデアのヒントになるかもしれない。「だから「一家にひとり、芸大生」とお薦めしているんです(笑)。芸大生が家や会社にいると面白いですよ。こんな発想ができるのかと驚かされるのがたくさんあると思います」。移転後、近隣地域は芸大生の学びの場となり、生活の場となる。「積極的に地域社会に溶け込んで「地域にひとり、芸大生」と思われたいですね。発想が斬新だったり、デザイン、絵画、演奏など表現に長けてたりいろんな学生がいるので、地域の方は芸大生から芸術の魅力と可能性を身近に感じていただきたい。そんな交流をとおして、大学ではできない経験を積み地域社会と国際舞台の両方で活躍できる人材を育てていきたいですね」。

苦しいときこそ、 心揺さぶる芸術を。

ここ数年を振り返り、コロナ禍は図らずも芸術について再考する機会になったと赤松さん。「本学でも授業がオンラインになり、文化芸術は不要不急のものという風潮に巻き込まれ展覧会や演奏会も中止になりました。人と人が共に何かをつくり、作品とその場で対話したり、生の音を聴いたり、芸術に直に触れることがいかにかけがえないものかということに、私たちも改めて気づかされたんです」。

また、展覧会や演奏会を再開し、多くの人の声を聞く中で京都芸大の根幹にあるものを再確認したという。「それは京都の人々は苦しいときこそ、芸術は新しい時代を切り拓く力と考えるということです。本学の起源である京都府画学校は奠都により京都が衰退していたとき、復興を目指す若い絵師たちの思いを集めて設立された学校です。昭和27年(1952)に開学した音楽学部の前身である京都市立音楽短期大学は、戦禍の苦しみが消えていない時代に京都の人々の希望をのせて開学しました」。



比叡山・東山の山々をのぞむ、鴨川沿いに位置する屋上のグラウンド。

そしてこの秋、京都芸大は多くの人の後押しを受けて新たな歴史を刻み始める。「テラスのような大学として地域の文化や歴史に寄り添い、学生と教員がそれらをヒントに芸術に取り組み、その成果を市民にユニークな人材育成や研究成果で還元するというサイクルをつくりたいと考えています。同時に京都市の中心部に近い地の利を生かし、企業や他大学、研究機関と芸術を通じて刺激を与え合う関係を強めることで、芸術の新しい可能性を発信し、文化芸術都市・京都のさらなる発展に寄与したいと思っています。芸術の力で新しい時代を切り拓く、京都芸大の新たな挑戦にご期待ください」。



河原町塩小路南のJR線路沿いの高架上から見た建設中の新校舎(写真は令和5年1月撮影)。

京都市立美術工芸高校

京都芸大と共に、文化芸術都市・京都の表玄関を目指す。

なわの しんご
名和野新吾さん
京都市立銅駝美術工芸高校 校長

令和5年4月、京都市立美術工芸高校に校名を変更して京都駅東部エリアに移転する銅駝美術工芸高校。校長の名和野新吾さんに、同校の教育コンセプトや移転後の近隣地域との関わりなどについて伺った。

移転を機に校章を策定。



生徒が美を通して、未来への希望をもって成長できる学校でありたいという願いが込められ「美」をシンボライズ化。全体のフォルムは生徒の豊かな感性や可能性の広がりを表現し、京紫と金のカラーは、京都が大切にしてきた伝統や優雅さ、価値のある種をイメージしている。



「0」から「1」を生む力を養う。

「美術」を「学ぶ」から「美術」で「学ぶ」学校へ」という教育コンセプトに込めた想いを、名和野さんはこう語る。「美術の知識や技術の習得はもちろん、美術を通して様々な社会とのつながりの場を広げ、今までにない新しい価値観を生み出す創造性豊かな生徒を育てる学校への転換を図りたいと考えています。アートの世界は「0」から「1」を生み出すものであり、常識にとらわれない発想から何かをつくりだそうとする姿勢こそが、答えのない時代を生き抜く力になると考えているのです」。

移転後は校舎の床面積が増え、生徒たちの可能性を広げるための施設や設備も充実する。「今後は、美術を核として教科・専攻を超えた学びを進めるとともに、全生徒がデジタルアートなどの新しい分野に接することができる特別教室、さらに放課後に自分が学びたいことを学べる演習室を新たに設けるなど、生徒たちの可能性を最大限に伸ばすことができる環境を整えています」。

近隣地域との交流を成長の糧に。

移転後には京都芸大との距離がグンと近くなる。「本校の校舎と大学の工芸棟が上空通路で結ばれ、生徒たちは大学生の創作現場をいつでも見学できるようになります。また、学校の帰り道に大学のキャンパス内を歩くことができ、そうすると自然に大学生との交流が生まれることでしょう。京都芸大には本校の卒業生が多く在籍しており、先輩との会話は生徒たちにとてもよい刺激になると思います」。

近隣地域との連携にも期待がふくらむ。「現校舎においても生徒たちは、近所の方の似顔絵を描いたり、地元のお店へ商品パッケージを提案したりと、地域と連携したさまざまな体験を通して、成長してきました。既に移転先地域の小中学校との交流や地域行事での作品展示などを進めており、移転後も近隣地域と連携を深めることで、学校が地域とともに発展し、生徒の成長にもつながってほしいと考えています」。

将来の展望について、名和野さんはこう語る。「京都芸大と共に文化芸術都市・京都の表玄関になりたいですね。そして多くの方から、『美術工芸高校』が来てまちにより活気がでたといわれるよう、生徒たちと一緒にがんばります」。



春には鴨川沿いの桜並木をのぞむことができるテラス(写真は令和5年1月撮影)。



校舎中庭にそびえ立つ、昭和6年に元崇仁小学校に植樹されたイチョウの木。



プログラミングで子どもたちと交流。

「チームラボ あそぶ!天才プログラミング」in 凌風小学校

令和6年度中、京都駅にほど近い八条河原町の南東に、複合文化施設の開業が予定されている。本施設を計画する「京都駅東部エリアプロジェクト有限責任事業組合」の代表組合員のチームラボにより、地域連携の一環として、令和4年12月5日・6日の2日間にわたり、開業予定地が校区である凌風学園(京都市立凌風小中学校)で「チームラボ あそぶ!天才プログラミング」が実施された。自分で描いた絵が動き交流する様子に、教室は生徒の笑顔と歓声に包まれた。



当日は、凌風学園3・4年生の「総合的な学習の時間」に、デジタルテクノロジーによるアートを手掛けるチームラボが開発したプログラミング学習教材「チームラボ あそぶ!天才プログラミング」を活用し、プログラミングに関する授業を実施。

INTERVIEW 京都市立凌風小中学校(凌風学園) 岩佐武司学園長

プログラミングをととして共同的な創造性を育む。

京都市では小学5年生からプログラミング学習を行っており、それに対する興味喚起を目的として3・4年生を対象に当校区に令和6年度に開業を予定している複合文化施設に関わる「チームラボ」の協力のもと、今回のワークショップを実施しました。「令和の文房具」といわれるタブレット端末は、本校でも日常的な学習ツールになっています。今後、子どもたちがタブレット端末を使って新たな活動を始めるのに必要な知識と技術を楽しく学べたのは、大変意味のあることだと考えています。

ワークショップの内容で非常に意義深いと感じたのは、自分で描いた絵をプログラミングを通して自分の思いどおりに動かすという点です。これにより子どもたちは「見るもの」という受け身の存在であった創作を、「するもの」としてとらえ始めたのではないかと考えています。また、友だちと一緒に、描いた絵を動かすことにも感心しました。自分一人だけの想像力には限りがあるので、子どもたちは共同的な創造性を広げる新たな視点を得ることができたのではないかと思います。

京都芸大・美術工芸高校(現・銅駝美術工芸高校)の移転に期待。

京都市立芸術大学と京都市立美術工芸高校の移転に大いに期待しています。小中高大の連携をととして、子どもたちは自分と近い年齢の学生や生徒に将来の目標につながる話を聞いたり、学校ではできない体験をさせてもらったりすることで夢をふくらませ、それは自分の可能性に挑戦する意欲につながります。また、芸術作品を目にすることは日常生活では少ないので、キャンパスで本物のアートに触れる機会を子どもたちに与えてくださることを期待しています。



令和6年度中完成予定 チームラボのアートミュージアムなど 京都駅東部エリアに 複合文化施設が開業。

京都駅にほど近い八条河原町の南東には、チームラボのアート作品を常設展示するミュージアムの他、世界的な体験型アートセンターの誘致や、市民ギャラリーの設置が予定される。京都駅東部エリアの活性化や、東部エリアに移転する京都市立芸術大学や京都市立美術工芸高校、地域との連携が期待される。



これからの社会は人間にしかできないこと、つまり共同的な創造性が最も重要と見え、共創を楽しむ体験が、今、人々にとって非常に大事なのではないかと考えています。今回の凌風学園の出張授業を皮切りに、プログラミングワークショップなどをととして今後も京都市の小中学校との連携を考えています。(チームラボ)



東本願寺前市民緑地

いつまでもきれいで、
安らぎと楽しみのある
緑地であってほしい。



ふくながしやうぞう
福永荘三さん
福永念珠舗
代表取締役九代目社長

令和5年3月、東本願寺前に京都市初の「市民緑地(※)」が新たに誕生する。寛政9年(1797)の創業から今日に至るまで、東本願寺前で念珠のお店を営む福永念珠舗の九代目であり、生まれも育ちも東本願寺界隈の福永荘三さんに、子どもの頃の東本願寺前での思い出や、市民緑地への期待について語ってもらった。 ※都市緑地法に定められた、地方公共団体等が土地所有者との合意の下、住民の利用に供する緑地又は緑化施設。

東本願寺前の噴水で水遊び。

子どものころ、東本願寺一帯が遊び場だったという福永さん。「噴水の中に入ってよう水遊びしました。今そんなことしたら怒られますけどね(笑)」。東本願寺前というと桜並木で知られるが、実はその木は福永さんのお父さんが植えたもの。「秋のイチョウみたいに春は桜があったらえなという事で30本ほど寄付したんです。ちょうど烏丸通の市電がなくなったころのことです」。桜については笑みを浮かべつつ、こんな思い出を語ってくれた。「緑地帯には水道がなかったので、親父が店からホースを引っ張り出し、烏丸通をまたいで植えたばかりの木によう水やりしてました。ホースの上を車が通るたびに水がビュッビュッってね。今では考えられん話です」。

芸大生のアイデアに期待。

新たに整備される市民緑地について、福永さんはこんな期待を寄せる。「まちなかにこんなに広くて緑が多い所はそうそうないので、たくさんの人に

のんびりしに来てほしいですね。子ども連れの御家族なんかにびったりの場所だと思いますよ」。同時に「この地を代々見守ってきた者として、きれいな景色を次の世代に継承するための努力と協力をしていきたい」と考えつつ、「東本願寺前の地域を盛り上げるため、憩いの場だけでなく賑わいを生む仕掛けがほしいという思いを持っている」。

そういった意味で、福永さんの京都市立芸術大学の移転に対する期待は大きい。「芸大生と連携したアートフェアや花灯路など、いろんなイベントができればいいですね。芸大生ならではの発想でこんなことがしたい、こんな作品を展示したいといったアイデアを出してもらえたらと思います」。そのためにも芸大生に地域のことを知ってほしいと福永さん。「この辺はもともと東本願寺の寺内町で、昔からお寺のために仕事をする職人が住んでいたまちです。うちみたいな数珠屋のほかにも仏壇屋、扇子屋とか表具屋とかいろんな職人がいるので、そういった人たちとマッチングしてものづくりをしたり、こちらが大学の授業に出向いたり、学生にこのまちなじんでもらう方法はいくらでもあると思いますよ。せっかく京都芸大が移転してくるので、一緒におもしろいことをできると嬉しいですね」。

令和5年3月24日完成
多くの方に愛される新名所
『東本願寺前市民緑地』誕生。

東本願寺前一帯が、京都市、東本願寺をはじめとした関係者の協働による整備で、市民緑地となる。これまで以上に「賑わい・憩いの空間」「歴史・文化の発信の空間」「修学旅行生などのおもてなしの空間」となり、市民はもとより、多くの方々が利用できる緑豊かな空間をめざす。



若手アーティストが京都市立芸術大学移転予定地周辺で活動を行う「移りゆくまち」プロジェクト。今回は京都芸大の学園祭である「芸大祭」の実行委員長を務めるとともに、大学移転予定地周辺でものづくりのプロジェクトに取り組む、京都芸大美術学部の鳥井直輝さんの活動を紹介します。

お祭りや
ものづくりで
大学周辺の
まちを
盛り上げたい。

とりのいなる
鳥井直輝さん | 兵庫県出身 京都市立芸術大学
美術学部 デザイン科 2年生



地域の祝祭として芸大祭を。

昨年11月、芸大祭が3年ぶりに現地開催された。そのメインテーマである「くつけキャンパスへ、ようこそ。」について鳥井さんはこう語る。「沓掛キャンパスでは最後の開催ということで、多くの人に来てほしいという願いをこの言葉に込めました。おかげさまで3日間で4千人を超える人にお越しいただき、音楽学部生と美術学部生がコラボレーションした京都芸大ならではのミュージカル、芸大祭恒例のファッションショーなど多くのイベントが大いに盛り上がりました」。展示では、第1回から今回まで40年分の芸大祭のパフレットを集めた企画が好評だったという。

芸大祭の次回開催は未定で、自分もどのように関わるかまだ分からないが鳥井さんはこんな構想を抱いている。「京都芸大移転先周辺の飲食店等と一緒に模擬店を出せたら面白いなと思っています。また近くのお店で作品展示をしたり、路上で演奏会を開いたり、大学周辺のまちのお祭りとしての芸大祭というコンセプトもありかかと考えています。そうすれば近所の人も参加しやすいし、そのほかの地域の人も一度行ってみようかという気になるかもしれませんからね」。



芸大祭に先駆けて、令和4年10月29日、京都駅ビルで、美術学部生による独創性あふれる衣装や装飾と、音楽学部生による力強い演奏による仮装パフォーマンスがおこなわれた。

デザインで周辺地域に貢献。



鳥井さんは現在「きょうげいB-LABO」という、移転先の周辺地域に根差したもののづくりのプロジェクトに取り組んでいる。「第一弾として崇仁地域の皮革の仕事に携わる方に御協力いただき、革を使った椅子を昨年11月の崇仁文化祭で展示したほか、ワークショップも開催しました。デニムや樽の端材・廃材を使ったものづくりも計画していて、今後はプロジェクトで生まれた商品を地域ブランドとして販売したいと考えています」。

「きょうげいB-LABO」を立ち上げたきっかけは、鳥井さんのこんな思いだった。「京都芸大の移転を契機に、移転先の地域に入って何か制作したいと思ったからです。そして、自分が学んでいるデザインには課題解決という役割もあり、大学周辺のまちのさまざまな悩みをデザインをとおして解決したいと思い、取組をスタートさせました。こうした活動をとおして、京都芸大のものづくりが広く地域に浸透してほしいですし、芸大生は親しみやすい存在だということを伝えていきたいです」。大学周辺地域の事業者や住民の方と話していると、芸大移転への期待が大きいと感じるという鳥井さん。「移転後も地域に溶け込み、皆さんの思いにデザインでどんどん応え、大学の周りのまちを盛り上げていきたいですね」。



下京いきいき活動センターでは「きょうげいB-LABO」の活動内容のパネルをはじめ、デニム・革・樽の端材や廃材、革の端切れを使用したコインケースが展示された。